航跡

ロシア船笠戸丸

藤崎康夫

航跡

ロシア船笠戸丸

藤崎康夫

時事通信社

著者紹介

藤崎　康夫（ふじさき　やすお）

昭和11年，東京生まれ。熊本大学，東京綜合写真専門学校卒業。現在，パウリスタ新聞東京支社長。日本写真家協会会員。著書＝「棄民」（サイマル出版会），「陛下は生きておられた」（新人物往来社），「サントス第十四埠頭」（中央公論社），「ベトナムの難民たち」（ワールド・フォト・プレス），「御岳山噴火」（桐原書店）

航　跡——ロシア船笠戸丸　　定価 1300円

昭和58年5月10日　発行

著　者　藤　崎　康　夫

発行者　岡　田　舜　平

発行所　株式会社 時事通信社

東京都千代田区日比谷公園 1-3　〒100
電話 東京03(591)1111(大代表)　振替 東京 4-85000

印刷所　中央印刷株式会社

製本所　大口製本印刷株式会社

©1983　YASUO FUJISAKI

（落丁・乱丁はおとりかえいたします）

0036—　——3199

目

次

航跡——ロシア船笠戸丸

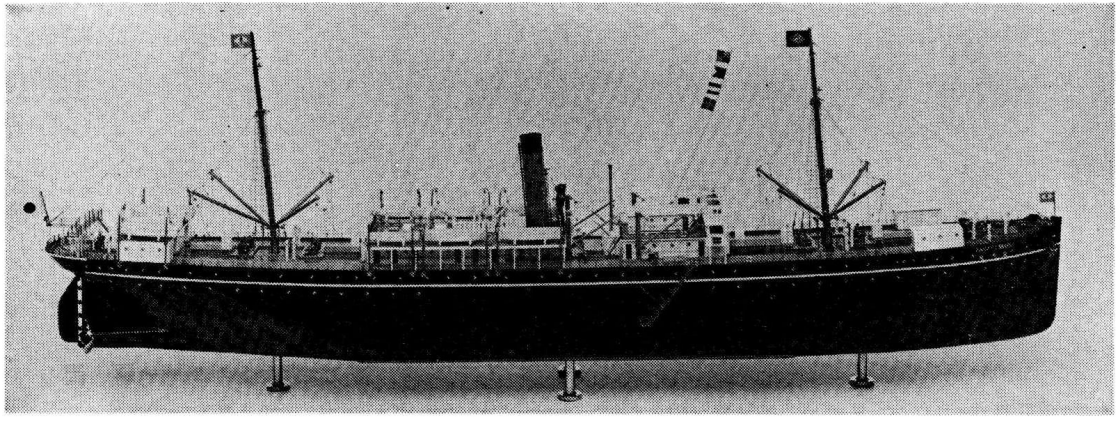
プロローグ——3
I カムチャツカに消ゆ——9
沈没 10
小樽出港準備 36
カムチャツカ抑留 49
II 植民地争奪時代——59
造船競争 60
極東での覇権争い 69
日露開戦 78
「笠戸丸」の誕生 88
III 南米移民船——99
ブラジル移民第一船 100
移民輸送船 111

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

サントスへの航海 127
移民逃亡 157
Ⅳ 名船「笠戸丸」 173
豪華客船に変身 174
病院船として揚子江へ 191
Ⅴ 工船 201
いわし工船へ転進 202
カニ工船へ 216
キ五〇四船団 232
あとがき 251

装丁・高麗隆彦

航跡——ロシア船笠戸丸



笠戸丸　（明治村に展示されている模型）

長　さ	400 フィート 5 インチ
幅	50 フィート
深　さ	38 フィート
トン数	6023 トン（建造時）
速　力	14.5 ノット
進水年	1900 年
造船所	Wingham Richardson & Co., Ltd., New Castle, England

プロローグ

笠戸丸、最後の船長宅は、瀬戸内海の波静かな入江に程近い小高い丘の端に建っていた。やわらかな陽射しが、丘陵やその下に広がる田畑や小聚落を包み、道端の小さな草花も黄色や白い花弁をつけ、空も、風の匂いも、穏やかな春の風情を描きだしていた。

私は、呉線の呉駅に下車した。広島駅から呉駅まで約四五分である。一八八九（明治二十二）年に海軍鎮守府が置かれて以来、呉市は軍港都市として栄えたところである。今は、軍人が町を占領した往時を偲ばせるものはすでになく、街路を歩く海上自衛隊の四、五人の若者の姿が、わずかに面影をとどめる。この呉は、かつて笠戸丸が船籍を置いたところでもある。呉駅からバスに乗り換え、町はずれに出て警固屋で降りた。いま私が警固屋の中本宅を訪ねる理由は、「笠戸丸」と呼ばれた一隻の汽船の最期の模様を、少しでも詳しく知りたいと思っていたからである。

あの日から、やがて一〇年という歳月が流れるというのに、すでに故人となってしまった一人の老女の笠戸丸の消息をたずねる声が、私の耳には、いまもはっきりと残るのである。私が彼女に最初に会ったとき、すでに八十九歳という高齢であった。福島県の桜の花が美しい里で生まれ育ったと話す老女

は、日本から二万キロ離れたブラジルのカンポグランデ市郊外の家で、ひっそりと余生を送っていた。日本から訪れたと話すと、私の手をしっかり握り、長い間離そうとしなかった。久しぶりに使うという日本語で、

「いまは、カサトマルはどうしてるんか。わしはあの船できっと日本に帰るつもりでブラジルに来たよ。笠戸丸はいまもサントスのポルトに来るかね。兄さんは笠戸丸は知ってるかね」

と、四時間ほどの話のなかで、数十回、彼女は繰り返した。その翌年、訪ねたときも同じであった。

私は、老女が六〇余年、この一隻の汽船で故郷の寒村のわが家に帰ることを夢見て、異国で生きつづけてきたことを知ったとき、胸をしめつけられる思いであった。迎えに来てくれるはずだった笠戸丸の消息をことのほか、老女は心配していたのである。

最期の詳しい様子はわからないまでも、その船が、すでにカムチャツカ西海岸沖で沈んでしまっていることを、私は帰国後、知り得たが、生前、それをこの老女に伝えることは、どうしても無残に思えてできなかった。しかし、その消息を報告しないことが、私の胸の奥底で、いつも重い気持ちとなって残っていた。老女が故人となってしまったいま、彼女が夢にまで見て、消息を求めつづけてきたその一隻の船の数奇な生涯を綴って、長年の約束を果たしたいと私は考えていた。

笠戸丸の消息を求めていくうちに、最後の船長が、呉市警固屋に住む中本秋人であることを知ったが、すでに故人であった。でも、せめて文子夫人からその夫のことを少しでも話してもらえればと、私は警固屋を訪ねたのである。海の匂いや潮騒が届きそうな応接間で、長崎市から遊びに来ているという

孫をひざにのせ、夫にまつわる話を夫人は心よくしてくれた。中本秋人は、この地元の農家のせがれとして生まれたが、丘の向こうに広がる瀬戸内海を往来する大小さまざまな船を朝夕見ながら育ち、少年の頃から世界の海を制覇したいという夢を描いていた。親の強い反対をついに押しきり、商船学校に入った人だという。根っからの海の男であったと、夫人は夫について回想する。

太平洋戦争中の夫の行動について、妻は知る術がなかった。当時、船舶の行動は、軍事上の機密であり、他言することは許されなかったからである。中本は決してそれを妻に語らなかった。たまに帰宅するとき、手土産に下げてくる明太子などから、夫人は、その行き先を推察するぐらいであった。笠戸丸については、戦後も妻に詳しく語ることは、ほとんどなかった。しかし、夫人は笠戸丸に乗船したまま消息を絶った夫が、二年のカムチャツカでの抑留生活を終え、突然、家族のもとに帰って来た日の様子を、いまも手にとるようによく憶えていると語る。まだ敗戦の色が濃く残る、秋の日である。

「大きなリュックを背負った男が、私のこの家に入って行くのを外で見たんです。そのうしろ姿を見て、一瞬〝誰かな〟と思って、家に入ると、主人が玄関で泣いていたんです。『あら、やっぱり帰っていたんですか』といったんですが、そのあとは言葉にならないんです。主人は部屋に上がると、すぐ仏壇の前に行き、座ったまま男泣きをしていました。私も若かったんでしょうね。二年ぶりで帰って来た主人に、はずかしさが先立って、しばらくものがいえませんでした」

と夫人は、いまは笑みを浮かべながら語る。気丈なことで知られた夫が、仏前で男泣きする姿は、長い歳月が流れてしまったいまも、洗い流されることなく妻の瞼に残っている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夫の留守中、広島市を焼きつくし、数えきれない人命を一瞬に奪い、その後もあまりにも深い傷跡を残した原爆で、中本家は中学生だった長男を失った。夫人は残る三人の子を背に負い、手をひき、まだ燃えつづけ、くすぶる街を長男の姿を求めて歩きつづけた。足から流れる血にも気づかず探し回ったが、その遺体すら見つけることができなかった。船長中本は、抑留生活中、部下の船員一一人の命を失った。家族のもとに生きて帰ることのできなかった部下の遺骨を彼は胸に抱き、帰国した。豪気な男が、泣かなければならない胸中は、妻には察知できた。戦争は、やわらかい陽光に包まれるこの家にも、重くのしかかっていたのである。

「主人は抑留生活のことを余り話しませんでしたが、同じ笠戸丸に乗っていた通信長でした石川さんが『奥さん、話をしたら泣けてとても聞かれやしませんよ』と、よくおっしゃっていました。笠戸丸についてのお話はできませんが、そんなにみなさんが思いをかけていらっしゃる船でしたか」

と夫人は語る。もの静かなひとである。

「確か主人の遺品のなかに笠戸丸のものがあったはずです。大事にしていたようですが、孫の代になればわからなくなってしまうでしょう。お役に立つならお渡しした方がいいと思いますので、しばらくお待ちください」

五分ほど奥の部屋に行き、再び応接間に姿を見せた文子夫人から手渡された船長の遺品は、長さ約四〇センチ、幅約四センチの木片と、文字が書き込まれた数枚の色あせた用紙であった。それは笠戸丸の左舷の木片だが、そこには墨で、

——抑留中カムチャツカ南オロスコイ海岸ニテ拾得　20、11、20

と、達筆な字があった。また木片を包んであった一枚の用紙には、

——日魯会社テジマ工場医　中村善博所有　六十八才

と書かれていた。またもう一枚の用紙には、同じ墨文字で次のように記されていた。

——十一月廿日（筆者注、昭和二十四年）労務員ヨリ本品拾得持参アリ　笠戸丸ノ或ハ変事アリシニハアラズヤト感知セリ　果セルカナ撃沈セラレタル紀念ノ一部品ナリ　貴重品トシテ筐底ニ秘シ貴下ト面接捧呈ノ約ヲ履行スルヲ得タルヲ喜ブ　乞フ御保存アランコトヲ（以下略）

なんの変哲もない木片だが、裸同然の抑留生活のなかで、何よりも大事な品として老医師が持ちつづけ、そして船長に届けたという行為のなかに、ここにも笠戸丸に深い思いを寄せていた人びとがいたことを知った。

別の二枚の用紙には、ペン書きの清楚な文字が並んでいた。一枚は「人名簿」であり、もう一枚は「死亡者名」であった。いずれも中本の手によって書かれたものであった。「死亡者名」には、それぞれの死亡月日、年齢、出身地、死因が記されているが、「心臓脚気」「壊血病」「肺炎」という文字が目立ち、抑留生活のいったんがうかがえるものであった。一方、「人名簿」には五八人の氏名、年齢、住所が記されていた。残る一枚の用紙は、昭和二十二年十一月一日付、函館上陸地連絡所長名の笠戸丸船長中本秋人宛の遺骨および遺留品の受領証であった。

どれも笠戸丸の最期を知るうえに貴重な資料となるものばかりであった。「人名簿」は当時の乗船者

の証言を得るうえで大きな手がかりとなった。私は、これら貴重な笠戸丸の資料の保存先に、同船の精巧な模型が展示されている博物館「明治村」を選び、土屋博靖東京事務所長を訪ねたとき、同氏が集めた笠戸丸の貴重な資料を提供していただいたことも、この一隻の汽船の航跡を明らかにするうえで大きく役立った。

同じ船であっても、軍艦のように表舞台に立つことのない商船の場合、残された資料や記録は少ない。軍人と黙々と働きつづけた庶民との違いのようなものである。しかし、この笠戸丸に深い思いを寄せる人びとは、南米のブラジル、ペルー、アルゼンチンに、雪の深い青森県津軽半島に、北海道に、新潟に、神戸に、和歌山に、……いたるところにいた。ブラジルには、この一隻の汽船を永遠に記念する通りの名前もある。

あの農婦の老女に出会ってから一〇年の歳月のなかで、私は折をみて、笠戸丸を知る人びとを訪ね歩いた。一様に彼らはこの汽船をなつかしんだ。その言葉に、一隻の汽船の航跡を知るとともに、近代日本の針路を私は見た。

「そうでしたか、可哀そうでしたね」

「八月九日に沈んだんですか。どうしたのかと思っていましたが」

笠戸丸の最期を知り、感慨深げに語る人びとであった。

Iカムチャツカに消ゆ

沈没

一九四五（昭和二十）年八月九日。

ソ連領カムチャツカ半島西海岸ウトカにある日魯漁業会社のサケ・マス工場の浜から約一二〇〇メートルの距離まで近づき、笠戸丸は投錨していた。夏の盛りとはいえ、北の果てに近いカムチャツカの陽光は柔らかいものであった。

笠戸丸は戦況が悪化を極めるなかで、日本に残された僅かな大型汽船であった。武装で固めた軍艦のような勇姿ではなかったが、その船体には風格があった。二本マスト、煙突一基、六〇〇〇トン級の重厚な船腹、とくに船橋から船尾にかけて流麗だった。貨物船とはいえ、客船時代を偲ばせる装飾が船内に残っていた。その風格はこの船がその船体に刻んできた歴史が醸し出すものだろう。

「明日は、帰航だ」

「帰りにやられなければいいがね」

と、作業も一段落した船内で、船員たちは話し合っていた。

七月二十七日、小樽を出港した笠戸丸と第二龍寶丸（二二三〇総トン）の二隻の運送船は、海防艦三六号、五七号に護衛されてカムチャツカにやって来た。米軍機の襲撃と潜水艦の雷撃を極度に警戒しての航海だった。八月一日夜半、笠戸丸はウトカ沖に無事到着した。北方海域も米軍の勢力圏内であり、航

行する日本の艦船の被害がつづいた。千島の守備に向かう将兵に限らず、北洋漁業に従事する民間の犠牲者も多かった。サケ・マス工場で働く若い女工たちも船と運命をともにしていた。すでに笠戸丸も、この海域で米軍機の襲撃、潜水艦の魚雷攻撃を体験済みだった。危機一髪で助かったこともあった。

「運の強い船だ」

と、船員仲間ではいわれた。しかし、決して運だけではなく、四五年の船齢にもかかわらず急造の新船ではかなわぬ性能を持ち、ベテラン船員が多かったことが危機を救った一因とされた。

一日、沖合で笠戸丸は海防艦、僚船と別れた。第二龍寶丸はさらに北上を続け、キクチク沖へ向かった。笠戸丸は日魯漁業のウトカ工場、第二龍寶丸は同社のキクチク工場の前年の残留製品の輸送が、その任務であった。しかし、それは表向きの理由で、その裏にもっと他の理由が隠されているのではないか、と多くの船員たちが考えていた。船団会議で護衛艦側から

「それだけの製品を大きな危険を冒して運んでも、道民にサケの一切れも配れるわけではない。こんな時節に船団まで組んで西カムチャツカに行く必要があるのか」

という質問が出されたのに対し、北部第五方面軍司令部側は、

「ある」

と答えたという話を、笠戸丸の通信長石川武男たちは聞いていた。この年、カムチャツカへの出漁中止を先に決めていた日魯漁業の態度が急変したことも、疑惑を抱かせる一因であった。カムチャツカ行きが発表されると、日魯漁業の作業員の退船希望者が続出したので、連日連夜、会社幹部の作業員への

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com